‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

87号 1994.6.27
文・編集・発行
恋 怪子

LIVE：MOTÖRHEAD 1994.5.26 川崎クラブチッタ

6時の開場時間ぴったりに開場。開演時間の7時にすこしだけ遅れて客席が暗くなり、MOTÖR HEADの4人がステージに出てきた。と思ったらいきなり全開バリバリで“ACE OF SPADES”。心の準備がととのう間もなく、この最初の一曲でテッペンまでもっていかれた。それからアンコールをふくめての1時間半、観客を煽ることも、観客に影響されることも一切なしで、MOTÖRHEADは「これがあたりまえなんだ」と言わんばかりにスガンスガンとロックンロールを疾走させていった。淡々とやっているのに、ものすごいパワー、ヘヴィな歌と演奏。そして、ノー・ギミック。これこそロックンロール!!!!ロックンロールのエネルギーが体中をかけめぐった。ステージ近くまでいって、こぶしを振りあげ、「ウォーッ」と叫び声をあげ、その場で飛び跳ねた。なにがどうなってもいい。この瞬間を生きぬきたい。自分を汲みつくしたい。ただそれだけだった。楽しかった。最高だった。

MOTÖRHEADのロックンロールは、ダニー・シュガーマンが“APPETITE FOR DESTRUCTION”（「ガンス・アンド・ローゼズ 悪の華」）のなかで、「ロックンロールとは自由の音でコマーシャル向けではない。私はここでロックンロールをエンターテインメントとしてとらえているのではなく、生きるための源動力であり、それに触れた人々の人生を変えて、自由へといざなってくれる、そんな音楽としてとらえて語っているのだ。不可能はない、何をやっても許されるはずだ。たとえ明日命を落としても、今日を精一杯生きたのだから何も悔いはない、と聴き手やファンに揺るぎない確信を抱かせるようなロックンロールのことだ。明日という日は存在しない。なぜなら、今、という時が永遠に続いているからだ。明日なんて存在しないのだからいくら待っても無駄なのだ」と書いているロックンロールだった。

26日に続いて27日、28日とライブに行ったが、よかったのは初日と27日のアンコールだけだったのは残念だった。日を追って観客の数も多くなって、最終日はギュウギュウでおまけにノリがすごくて、最初はAブロックで見ていたのだが（A、Bブロックに分かれていたのはこの日だけ）、すぐ後ろの4、5人連れの長い髪の女の子たちが全員でヘッドバンギングするのに閉口して、Bブロックにうつったら、そこも後ろまでギッシリ。演奏に集中しようとしても演奏も歌もボワーンとしていて聞こえるのはドラムのビートだけ。そのうち立っているのもつらくなって、始まってから1時間くらいで会場を出た。

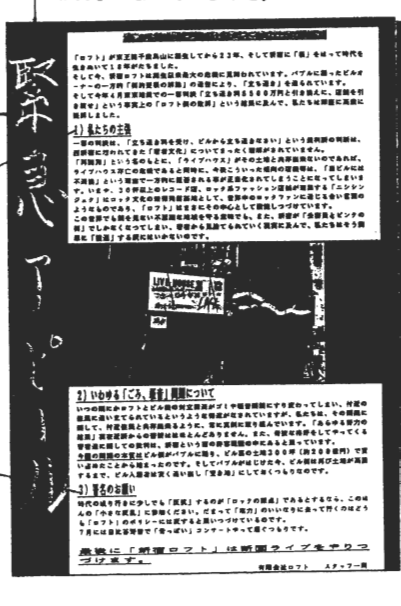
LIVEHOUSE：新宿ロフト

「いったいロフトってのは何だ。どの店員も客を客とも思わないエラソーな態度で、ライブハウスの老舗づらをするし、客の動員がよければくだらないバンドでもライブをやらせて、すばらしい可能性を秘めているバンドを育てることもしないくせに、ロック文化の中心の構えを装う。犯罪的なライブハウスだよ。ようするにロック以前なんだ。（例えば）「アンティノック」より「ロフト」のほうがいいなんてことは絶対ないさ。すくなくとも「アンティノック」は客を不快にするほどエラソーな態度はしないよ。この野郎たちは音楽雑誌や有名ミュージシャンたちの持ち上げにのってうかうかしていたじぶんたちを恥ずかしくおもえばいいんだ」

これは吉本隆明の「『反核』異論」のなかの「情況への発言 『反核』問題をめぐって」からの替え歌（パクリ）である。本歌は、

「いったい『日本読書新聞』てのは何だ、執筆者に、督促しないかぎりは銭も払わずに、商業書評紙づらをするし、スターリニスト崩れの出先機関に過ぎないくせに、天下の公器の構えを装う。犯罪的な新聞だよ。ようするに資本主義以前なんだ。『平凡パンチ』よりも『日本読書新聞』のほうがいいなんてことは絶対ないさ。すくなくとも『平凡パンチ』は資本主義のルールはきちっと守ること知っているよ。この野郎たちは『朝日新聞』や『岩波』文化の煽動の尻馬にのって、うかうかだまされたじぶんたちを恥ずかしくおもえばいいんだ」（「『反核』異論」84ページ）

「いまや、30軒以上のレコード店、ロック系ファッション店舗が密集する『ニシシンジュク』はロック文化の情報発信基地として、世界中のロックファンに通じる合い言葉のようなものであり、『ロフト』はまさにその中心として機能しつづけています。この世界でも類を見ない不思議な地域を守る意味でも、また、新宿が『公務員とピンクの街』でしかなくなってしまい、若者から見捨てられていく現実に及んで、私たちはそう簡単に『撤退』する訳にないかないのです」（緊急アピールより）などと。なにが「『ロフト』はまさにその中心として機能しつづけている」だ。笑止。ロフトがすばらしいミュージシャンを育てたからではなくて、そういうミュージシャンがロフトでかつて活動していたからにすぎないのに、ロック文化の中心づらをしてエラソーにふんぞりかえっている。そして、そのエラソーにしているロフトにシッポをふるミュージシャンや、なにかというとロフト（やシェルター）にたむろして、わがもの顔でエラソーにしているミュージシャン。ロフトがなくなって困るのは、ロフトとこんなミュージシャンだけだ。立ち退きの判決がでると、いままで客を客ともおもわないエラソーな態度をしていたくせに、ロフト存続の署名のお願いをしたり、ライブのあとロフト（やシェルター）の前にいるとゴミでも掃き出すように客を追い払っていたくせに（実際ほうきでそこらを掃き出したこともある）、こんどは猫なで声で（態度は相変わらずエラソーだけど）「付近から苦情がきますのでたまらないでください」とお願いをする。こんなところのどこがロックンロールだ。「時代の成り行きに少しでも『反抗』するのが『ロックの原点』であるとするなら、このほんの『小さな反乱』に参加してください。だまって『権力』のいいなりに去っていくのはどうも『ロフト』のポリシーには反すると思いつづけているのです」（緊急アピールより）。「小さな反乱」とは！ポリシーとは！笑止。笑止。こんな「反抗」や「権力」は、幼稚な学生運動レヴェルだ。エラソーな態度でロック文化の中心づらをしているロフトこそ真のロック文化にとっての「小さな権力」になっているのだ。


緊急アピール

1）私たちの主張

一審の判決は、「立ち退き料を受け、ビルから立ち退きなさい」という裁判所の判断は、西新宿に培われてきた「若者文化」についてまったく理解がされていません。
「再開発」という名のもとに、「ライブハウス」がその土地と共存出来ないのであれば、ライブハウス存亡の危機であると同時に、今後こういった傾向の店舗等は、「当ビルには不適当」という理由で一方的に拒否される事が正当化されてしまうことになってしまいます。いまや、３０軒以上のレコード店、ロック系ファッション店舗が密集する「ニシシンジュク」はロック文化の情報発信基地として、世界中のロックファンに通じる合い言葉のようなものであり、「ロフト」はまさにその中心として機能しつづけています。
この世界でも類を見ない不思議な地域を守る意味でも、また、新宿が「公務員とピンクの街」でしかなくなってしまい、若者から見捨てられていく現実に及んで、私たちはそう簡単に「撤退」する訳にはいかないのです。

3）署名のお願い

時代の成り行きに少しでも「反抗」するのが「ロックの原点」であるとするなら、このほんの「小さな反乱」に参加ください。だまって「権力」のいいなりに去って行くのはどうも「ロフト」のポリシーには反すると思いつづけているのです。
7月には日比谷野音で「骨っぽい」コンサートやって騒ぐつもりです。

最後に「新宿ロフト」は断固ライブをやりつづけます。

有限会社ロフト スタッフ一同